

オンライン大学に着任しました



作道直幸

ZEN 大学知能情報社会学部／東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻
[249-0007] 逗子市新宿3-12-11
准教授，博士（理学）
専門は理論物理学，統計力学，高分子物理学。
<https://researchmap.jp/sakumichi>

2025年4月、校舎への通学を前提としないオンライン私立大学に着任しました。開学2年目、学生は2学年合わせて約7,000名。文系理系の区別はなく、学部は一つのみ。「力学」「電磁気学」などの講義を担当しています。私の専門は、ゲルなど高分子の物理学です。懇親会などでよく聞かれる質問は「学生に会えるんですか」「実験はどうするんですか」。本稿は、その質問への中間報告です。

本欄の過去の記事では、オンラインや在宅勤務は、もっぱらコロナ禍の記録として、つまり一日も早く元に戻りたい非常時として語られてきたように思います。私はそれを、平常時の設計として自ら選んだ側です。そこから見える景色を、良いことも心配ごとも含めてご報告します。

担当する物理の科目には1学年当たり300名以上の受講生がいます。半数以上は物理学科志望どころか、いわゆる理系ですらありません。文系や芸術系を含む、さまざまな分野へ羽ばたいていく学生たちに物理を教えることに、大きなやりがいを感じます。

オンライン大学とはいえ、対面の機会もあります。幕張メッセで年に一度の大学祭があり、東京や大阪など全国8都市で交流イベントが開かれます。有志のサークル「物理部」を立ち上げると、150名以上が参加してくれました。本部のある神奈川県逗子市でのオフ会には、飛行機が必要な遠方も含めて20名以上が駆けつけてくれました。在学生は47都道府県のすべてと海外にいます。本欄でも以前に問題提起された「大学進学率の地域格差」¹⁾の解消にもつながるはずです。イベントで訪れた沖縄県石垣島では、地元の方からこんな話を聞きました。島には大学がない。だから進学とは、島を離れることだった。島を離れられない事情のある人が、地元との縁を保ったまま大学生になれる道ができたことは、とても大きいのだと。教室のない大学は、教室に通えなかった人たちの大学でもあります。

一方で、対面の大学では当たり前の、廊下の立ち話、研究室の空気、キャンパスでの偶然の出会い、オンラインでは自動的に発生しません。オンライン大学の弱点の一つですが、何もしていないわけではありません。全学でSlackの利用が必須です。やりとりは活発で、音声での雑談（ハドルミーティング）も頻繁に立ち

上がります。オンラインの“立ち話”は、教室の立ち話と同じではないものの、別のものとして確かに機能しています。また、文系理系の壁がない分、専門を越えた偶然の衝突はむしろ起こりやすいとも感じます。私は政策学が専門の教授が主宰する人文社会系のゼミに担当教員として参画し、「理系の論文を読んでCMを作る」という企画を行いました。たとえば、数学者である学長の論文を文系の学生が読み、理解できた範囲で作ったCMは、感動的でした。学部2年生から文科省の研究費に応募したいと相談を受け、指導教員として申請を支援しました。結果は抽選で落選でしたが、挑戦の経験は残ります。物理部はチームで量子コンピューター分野の課題解決コンテスト（NEDO）に応募し、スクリーニングを通過して活動しています。

ここまでは「私に見えている学生」の話です。Slackで発言し、オフ会に来て、コンテストに応募する学生は、自分から手を挙げた学生です。手を挙げない学生は、オンラインでは文字どおり見えません。自走できる学生がどこまでも伸びる設計は、裏を返せば、そうでない人には厳しい構造でもあります。

個人的には、すべての活動がオンラインで完結するとは思っていません。対面でしか得られないもの²⁾には、学生を送り出す必要があります。今夏の高分子学会主催のゲルワークショップには、本学の学部2年生が二泊三日で参加してくれました。

私自身、実験系との共同研究のため東京大学にも籍を置く二拠点で働いています。同僚には、ワイン造りやラジオパーソナリティなどと兼業する教員が多くいます。学生には社会人も多く、対面で会った方だけでなく、大工、自衛隊員、医師など多彩な職種の方がいらっしゃいます。全国各地で、それぞれの仕事と暮らしの中に大学があります。仕事や私事を手放さなくても教え、学べる場所だから、多様な人が集まるのだと思います。働く場所も学ぶ場所も、もはや一つではない時代が始まったのかもしれない。

文 献

- 1) 長田裕也, 高分子, **74**, 379 (2025)
- 2) ランデンバーガー キラ ベス, 高分子, **72**, 392 (2023)